

会 議 録

会議の名称	令和7年度 第1回茨木市文化振興施策推進委員会
開催日時	令和7年7月28日(月) (午前・ <b>午後</b> ) 2時00分 開会 (午前・ <b>午後</b> ) 4時00分 閉会
開催場所	市役所南館3階 防災会議室
委員長	出口委員
出席者	川本委員、雨森委員、常盤委員※、出口委員、落合委員、木村委員、宮崎委員 <small>※オンラインによる参加</small> <b>【7人】</b>
欠席者	池上委員、平田委員、飯嶋委員、原田委員
事務局職員	中井市民文化部長、今西市民文化部次長兼文化振興課長、 松本文化振興課参事、能勢文化振興課長代理兼政策係長、 秋本文化振興課主査 <b>【5人】</b>
開催形態	公開
議題(案件)	(1) 「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について (2) その他
配布資料	(1) 次第 (2) 諮問書(写) (3) 令和7年度「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について (4) 「つどい、つながる文化の会議」第1回実施報告書 (5) 茨木市文化振興施策推進委員会規則 (6) 茨木市文化振興施策推進委員会委員名簿
傍聴人	なし

発言者	発言内容
事務局 (今西次長)	<p>本日は、大変、お忙しい中、令和7年度 第1回茨木市文化振興施策推進委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。私は、市民文化部次長兼文化振興課長の今西でございます。委員長が決まるまでの司会進行を務めさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。</p> <p>開会に先立ちまして、市民文化部長の中井からご挨拶させていただきます。</p>
事務局 (中井部長)	<p>みなさん、こんにちは。市民文化部長の中井でございます。令和7年度 第1回茨木市文化振興施策推進委員会の開催にあたりまして、委員のみなさまに、一言ごあいさつを申し上げます。本日は、暑い中、また公私何かとご多用の中、ご出席をいただきましてありがとうございます。</p> <p>昨年度は、短期間の中でご審議をいただき、特に、専門部会委員兼任の宮崎委員、常盤委員のお二人におかれましては、非常にタイトなスケジュールで事業評価に係る報告書を作成いただき、ありがとうございました。そして、委員のみなさまにおかれましても、それぞれのお立場や経験の中で貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。</p> <p>今年度は、文化振興ビジョン（第2期）を策定しまして2年目となりますが、6月28日～7月13日まで、貸館を終了した福祉文化会館を活用し、本市で実施してきました現代アート事業を一举にご覧いただく大規模な展覧会を開催する等、茨木らしい事業に取り組んでおります。</p> <p>文化振興ビジョンが、めざすまちとして掲げる「未来につながる『文化のまち』いばらき」の実現に向け、引き続き「『つどい、つながる文化の会議』の事業評価」について、ご審議いただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。</p>
事務局 (今西次長)	<p><b>1 開会</b></p> <p>それでは、ただ今から、令和7年度 第1回 茨木市文化振興施策推進委員会を開催させていただきます。着席で失礼いたします。</p> <p>まず、委員の出席状況を報告させていただきます。全委員は11人となっており、本日ご出席の委員は7名ということで、過半数の出席をいただいておりますので、茨木市文化振興施策推進委員会規則第6条第2項により、会議は成立しております。</p> <p>次に、今年度1回目の委員会ということで、「委員長の選出」及び「職務代理者の指名」を行います。本委員会規則第5条第1項の規定により、本委員会に委員長を委員の互選により定めるとされており、また、第5条第3項の規定により、あらかじめ委員長が職務代理を指名することとされていますが、よろしければ事務局からご提案させていただいてもよろしいでしょうか。</p>

発言者	発言内容
委員全員	異議なし
事務局 (今西次長)	事務局案として、大変僭越ではございますが、昨年度に引き続き、委員長を出口委員に、職務代理を落合委員にお願いしたいと考えておりますが皆様いかがでしょうか。
委員全員	異議なし
事務局 (今西次長)	<p>ありがとうございます。ご異議なしということで、委員長は出口委員に、職務代理は落合委員に決定いたします。恐れ入りますが、出口委員長は委員長席へご移動願います。</p> <p>次に、議事の公開につきまして、前年度と同様に本会議は公開とし、傍聴者の資料閲覧及び持ち帰りを許可し、ホームページや情報ルームに設置する会議録については、要点筆記の形式で作成いたします。また、発言者の氏名は公表させていただくということによろしいでしょうか。</p>
委員全員	異議なし
事務局 (今西次長)	<p>最後に、傍聴者につきまして、本日は傍聴の希望者がおりませんので、このまま進めさせていただきます。</p> <p>それでは、これからの議事は、委員会規則第6条第1項の規定により、出口委員長に議事進行をお願いいたします。</p>
出口委員長	それでは、私から会議次第に沿って、議事を進行させていただきます。
出口委員長	<p><b>2 諮問</b></p> <p>それでは、まず、諮問にあたって事務局から説明をお願いいたします。</p>
事務局 (今西次長)	本委員会の開催にあたっては、委員会規則の第2条におきまして、「委員会は、市長の諮問に応じ、茨木市附属機関設置条例別表に定めるその担任する事務について、意見を述べるものとする。」とされているため、市長からの諮問書を受け、委員の皆様のお手元に写しを置かせていただいております。また、諮問の内容につきましては、昨年度に引き続き、「つどい、つながる文化の会議」の事業評価についてご審議いただくものでございます。
出口委員長	それでは、福岡市長から諮問のありました件につきまして、今後、当委員会にお

発言者	発言内容
	<p>いて審議することといたします。会議次第に沿って議事を進めてまいります。会議の終了は、午後4時頃を予定しておりますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。まず、案件について事務局の説明を求めます。</p>
事務局 (今西次長)	<p><b>3 案件</b></p> <p>本日の案件は、『つどい、つながる文化の会議』の事業評価について」の審議であります。詳細について、担当から説明いたします。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>【「つどい、つながる文化の会議」の事業評価について説明】</p>
出口委員長	<p>説明は終わりました。各委員のご意見、ご感想などをお話しいただけたらと思います。雨森委員から順にお願いできればと思います。</p>
雨森委員	<p>ご説明ありがとうございます。前回は踏まえて、いろいろと整理いただいてわかりやすくなったと思います。「つどい、つながる文化の会議」の評価とは違う話になりますが、前回か前々回に平田委員もおっしゃっていた、ビジョン策定後に本市でどのような事業を展開されているのかというのが見えてこないの、市民コーディネーターの育成だけではなく茨木市全体の文化芸術について、本委員会で見ていく必要があるのかどうかということについて、確認させていただきたく思います。</p>
出口委員長	<p>大事な質問なので、この件について事務局からはいかがでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>ご指摘いただきましたとおり、ビジョン策定後、全体的な進捗を見ていただくということになりますと、計画期間の10年間を見据えた中で、例えば5年目で中間の振り返りを行うのか、年1回ご意見をいただくのかというところの整理ができていませんので、この場では即答いたしかねるのですが、諮問している内容が一事業レベルとなっている中で市の事業全体を見ていただくという、そのバランスの悪さをどう解消するかという課題については、次回以降しっかりご報告させていただきたいと思います。</p>
雨森委員	<p>質問させていただいた理由としまして、このICAWの展示会も茨木にとって非常に大きな意味をもつ事業であり、これまで別々に実施されてきた現代美術の事業をまとめることで、いろんな成果があったと思われます。そこから、今後の課題も見えてくると思うので、今後につなげていくために、このような事業についても、本委員会の議題に上がってくると良いかと思えます。</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>ありがとうございます。</p> <p>雨森委員のご指摘は、非常に大事なポイントで、諮問・答申の対象はあくまで「つどい、つながる文化の会議」ですが、今のご発言にもあるように議論としてそのような外延的な案件、例えば、本日、木村委員からご提供いただきましたが、アメリカスミソニアン国立アジア美術館における木村委員の作品展示など、大変素晴らしいことがあるように、この場でそのようなことについて議論しても別に構わないという理解でよろしいでしょうか。</p>
事務局 (今西次長)	<p>はい。市として、諮問内容である体制づくりはやっているのですが、実際、具体的にはどのような取り組みしているかというところは、疑問に思われるだろうし、その部分の説明が不足しているかと事務局側でも感じておりましたので、雨森委員のおっしゃったご意見は検討していきたいと思います。</p>
出口委員長	<p>委員の皆さんにご意見を伺う前に、もう1つ事務局に質問させてください。</p> <p>いわゆる行政の評価というのは、政策評価などいろいろある中で、この「つどい、つながる文化の会議」に限って、市長から諮問を受けて、事業評価の答申を行うのかということの位置付けについて、例えば、答申結果がどのように今後影響するのかといった点について、簡単にご説明いただきたく思います。</p> <p>文化振興ビジョンという非常に大きい案件に対して、文化の会議の事業評価というものが範囲が小さく、ギャップを感じています。</p>
事務局 (今西次長)	<p>文化的コモンズの形成ということ、抽象的な取り組みのまま10年進みたくないという思いもある中で、文化の会議に取り組みながら文化的コモンズの形成をめざすということは、なかなか具現化しにくい部分であると考えております。</p> <p>イベント個別の評価という部分は、ある程度報告することができるかなというところはあるのですが、体制をどう整えているか、あるいは、人材をどう育成するかというところの進捗を説明、報告するところが難しいということもあり、あえてそういった部分につきまして、この委員会で包括的にというか、大きい部分での評価をお願いしたいと思っております。</p> <p>その評価が、今後の体制を整えていくための、フィードバックに繋がるようにしていきたいと思っております。それにより、今後の文化芸術振興への体制の部分への予算などを、行政内部でどのように検討していくかというところの材料の1つにしていきたいという思いがありまして、あえて、この人を育てる、体制をつくるという事業を諮問させていただいている次第であります。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。ちょっと委員長として余計なことを質問しましたけれども、それでは木村先生、何かご質問、ご意見はございますでしょうか。</p>

発言者	発言内容
木村委員	<p>前回に比べると非常によくまとまっていて、内容も細かく精査されていたと思います。ICAWの展覧会を拝見しましたが、非常に見ごたえのある興味深い展覧会でした。国立大学の学長になった2000年頃、大学においても変革が叫ばれていましたが、何より、世の中全体が変革の時代でした。</p> <p>では、それから現在にかけて、世の中はいかに変わったのか。IT技術が進み、AIが導入されるなど、便利になった点が多々ある一方で、情報が氾濫し、誤情報に惑わされるなどといった問題も見受けられます。そうした状況下で、茨木市では、確実に、いろいろな事を積み重ねてやってきた、といえるでしょう。ですが、残念なことに、東京で、茨木の話をして、大抵、茨城県のことだと勘違いされてしまいます。それだけに、「茨木ここにあり」と示せる取り組みを実現させることができればと強く思います。</p> <p>元茨木川が埋め立てられて人々が集う緑地帯になったり、福祉文化会館（オークシアター）ができたり、文化財資料館や川端康成文学館がオープンしたり、「まち」として成長した茨木のエネルギーを私は目の当たりにしてきました。</p> <p>2023年には、「おにクル」もでき、子育て世代を含む市民らを中心に、多彩な年代の人々が足を運び、出会い、対話の場となっています。こうした、新たな「きっかけ」をもとに、さらには、長く積み重ねてきた歩みの成果として、より大きな何かを打ち出し、飛躍を目指すときではないでしょうか。そうしてこそ、この会議の成果が出た、といえるのではないのでしょうか。</p>
出口委員長	<p>私なりの考え方を言わせていただくと、本事業のような、市民の方を公募して、何回か会議をしてもらい、そこで文化的コモンズを形成できるかどうかという、いわば実験みたいなものを、普通の行政は、こちらが提案しても絶対実現してはくれないと思います。逆に言うと、それだけ行政が清水の舞台から飛び降りるような形で、私個人がそんな発想をできるかというとてもできないようなことを今やっていただいているので、それを今回はみなさんで評価しましょうかということなのではないかなと思っています。</p> <p>木村委員は、アメリカスミソニアン国立アジア美術館で、本当に若々しい作品が展示されるという、すばらしいことも起きているので、そういう高みから見ると、まだまだかもわかりませんが、ぜひ、そういう高みから今のような発言をしていただき、叱咤激励していただければと思います。</p> <p>それでは、昨年、専門委員の方には、突然だったので、ご苦労されたと思いますが、今回の事業評価について、宮崎委員からご意見・ご質問あればお願いいたします。</p>
宮崎委員	<p>本事業の評価のことで言わせていただきますと、昨年参加させていただいて、い</p>

発言者	発言内容
	<p>ろんなところをみて、出口委員長もおっしゃっているように、行政がやるにはなかなか腰が重いような事業で、それを始められたことっていうことはすごく、ある意味日本全国の中でもパイロット的なお試しだと思っております。</p> <p>前回、評価をしながら、どのように評価していくのが揺れ動くというか、走りながら考えていく部分がありました。</p> <p>今年度に入って、事務局と事前の打合せをした際にもお話をさせていただいたのですが、自治体の文化事業は、評価をする際にどうしても数字に頼ってしまう。参加者の人数、属性や満足度など、どうしても見えるようなところを取ってしまいがちになる。</p> <p>ただ、やはりこのような事業もそうですし、文化事業や文化芸術そのものは、やはり、たくさんの人たちが来ればそれでいいですよというのではなく、来た人たちがどう変化していくのか、どう感じたのか、それが間接的にどのようにコミュニティに帰っていくのかなど、すごく回りくどいようなことを見ていくのが文化芸術の評価となっているので、数字だけではなくて、現場を見ることももちろんそうですし、今回ご提案させていただいたのが、参加している人たちに話を聞きたいということをお伝えしました。数字では見えてこないこと、現場でどう感じてどう動いたのか、変化したのかという点を、参加者の方々からお話を聞かせて欲しいということを追加させていただきました。</p> <p>加えて、実際にやっている、行政の方や受託者の方の皆さんからもお話を聞いて、いろんな方向から見える景色というものを、言葉に起こしていかないといけないのかなと思いましたので、今年度はそのような形で、いろいろな方向から、ストーリーを見つけていければなと思っております。</p> <p>また、私自身、この先駆的な事業で評価することはもちろん大切なのですが、この評価をどう活かしていくのか、どう使っていくのかというところがすごく気になっています。もちろんこの冊子を作ってWebサイトに載せるということはいいは思うのですが、それでおしまいなのかというと、そうでもないと思っています。行政の中での予算要求では使えることは、もちろんなのですが、やはり茨木市の中でこのような事業があつて、みんなが集まってどんどん文化芸術が好きになっていく、集まっていく。それが心地いい、だからここにいたいというような、何かダイナミズムを作るきっかけになるようなものだと思っており、評価して終わりじゃなくて、これをもとに、こんなことがあつたよねという語る機会があつてもいいかもしれないし、いろんなセクターとの結びつきを作るうえでも、何かイベントやトークなどにできるのではないのかなと思っています。</p> <p>出口委員長も、木村先生もおっしゃっているような、茨木の中で大きいダイナミズムを、文化や芸術の大きい流れと言いますか、エキサイトメントみたいなものを作っていくうえでは、やはりこういうところに関わった人たちが出向いていて、こんなこと面白いことあつたよね、こんなことすごいよねっていうのはもっと</p>

発言者	発言内容
雨森委員	<p>もっと引き出されて発信されて、何かそれが1つの大きな流れになっていくということが、これからの茨木というか大阪というか、日本全国どこでも必要になっていくのかなと思います。そのような何か起爆剤になるようなことにできないのかなと思っています。</p> <p>やっぱりみんなが好きで必要だよ、楽しいよねと思ってくれないと、文化芸術でどうしても、やはりコアでニッチな人達の集まりになってしまう。</p> <p>それだけではないって思わせるための何かにつなげられたらいいのかなと思っています。</p> <p>宮崎委員のお話をお聞きして、少し補足させていただきますと、やはりこれまで体験したことのないような衝撃や感動があって、人から人に伝わっていくということにつながっていくと思います。人材育成のプログラムとしてではなく、先ほどご紹介のあったICAWなど、実際の現場を経験してこそ、そういった表現活動に携わりたいとか、協力したいという気持ちが芽生えていくのではないかなとも思いますので、そこにどう繋げていけるのかが、次の課題なのかなと思います。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>文化の会議の3回目には、市内の活動団体に出向く予定をしております。あとは、今回公式には全6回開催予定なのですが、市の事業などに、もし何か関わっていただけそうなものがあれば、参加者のみなさんに投げかけて、興味が出た人は関わってもらおうというような仕組みも、今年度からやっていきたいなと思っています。</p>
出口委員長	<p>今の宮崎委員のご発言からするとですね、これ、昨年度は昨年度で、今年度は今年度での評価かと思うのですが、例えば昨年度参加された方が、昨年度だけで、終わるわけじゃなくって、その後、何か市民の方と交流して、そういう自発的なものが湧き上がってくるっていうのは、現象が起きた場合に、そういう情報がフィードバックされるような仕組みっていうのは、今あるのでしょうか。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>そのような仕組みは、特段ご用意できてないのですが、参加者の各々が活動されていて、その状況を個別にお聞きするような話もあります。例えば、昨年参加者も、昨年度の途中から、おにクルで市民活動団体にチャレンジをされているかたもいらっしゃいます。ただ、現状それを公式的に吸い上げるようなツールがないので、そちらは検討していきます。</p>
出口委員長	<p>宮崎委員、この年度で評価していくわけなのですが、今のような、例えば昨年度、この会議に参加していた方がアクションを起こして、ちゃんと情報取れるわけではないですが、たまたま取れた場合には、今年度の評価として加えることはでき</p>

発言者	発言内容
宮崎委員	<p>るのでしょうか。</p>
出口委員長	<p>できると思います。</p>
宮崎委員	<p>わかりました。ということなので、もしそのような情報があれば、なるべく専門委員の方にも、お伝えしていただくようお願いします。</p> <p>専門部会委員のお二人が現場に行かれるのは、昨年は1、2回であったと思うんですが、今回は何回いかれる予定でしょうか。</p>
出口委員長	<p>私は2回を予定しています。</p>
常盤委員	<p>わかりました。それでは、次に専門部会委員の常盤委員から昨年の経験などを踏まえて、質問や意見などがあればお願いします。昨年度に比べ今年度のほうが、評価書を作るうえでは、ハードルが下がっているかと思うのですが、そのあたりの感想なども含めて、お伝えいただければと思います。</p>
常盤委員	<p>宮崎委員がおっしゃったことに、私もかなり共感しております。なおかつ、出口委員長と木村委員が、会話の中で言及されていたように、この取組がある意味で画期的で、市民の方を有機的に巻き込んでいくということは、なかなかやりたくても手が出せない分野だと私も考えています。なので、私個人としても、茨木でこれから面白いことが起こっていきそうだと感じているので、楽しみにしているところです。</p> <p>まず、昨年度は期間も短い中でやってきたところ、今年度はかなり事務局の皆さんが考えておられて、中身がかなり構造化されているという印象があります。評価指標が体系化されていることはもちろんですが、事業全体が構造化されているということも、どこをみようかというふうな焦点が絞りやすくなっているので、評価しやすくなった要因かと思います。</p> <p>あとは、事務局から事前にご説明をいただいた中で、私の方からいくつかご提案させていただいた内容も盛り込んでくれていまして、例えばコーディネーターの立ち位置について、当初の案では、アートコーディネーターと市民コーディネーターが上下関係にあるような図式になっていたのですが、対等にそれぞれ役割があって補完し合うような関係であると思っていましたので、資料のような図に変えていただいてありがとうございました。</p> <p>参加者へのインタビューについては、私も大賛成で、アンケートの上がり下がりなどは非常に興味深いところなので、そういった数値の分析も重要なのですけれども、その数値の変化を分析するのに、やはりインタビューでの結果というのが補っていくということがあります。定性指標と定量指標の結果それぞれが補い合って、</p>

発言者	発言内容
	<p>全体像が見えてくるということもありますので、今回このような形でインタビューできることになったのも非常に評価作業としてはありがたいなと思っています。</p> <p>あと、定性評価の一環として、例えば毎回の集まりの冒頭で、前回から今回までの間で、前回までの内容を踏まえて、家族や友達とどのようなことを話したかと聞くことで、それぞれの評価指標を支え、補うような情報になると思われるので、進行の中でそのようなターンを設けることを、事前のご説明の際に私から提案させていただきました。また、やはり6回のプログラムに毎回来られない方もいると思うので、休む日があっても戻ってきやすいような設計も大事だと思っています。</p> <p>あとは、8～9月に色々な場所に視察に行かれるということで、これまでも様々な市民の方々の取組が茨木市内の各所でやってこられたとお聞きしていますので、すでにある取組や、そのこれまでの蓄積とかがあっていうものを、それにつながる文化の会議のメンバーがどのようにつなげていくのかということ念頭に、より広い視野で見えていきながら、冒頭少し議論になりました今回の諮問の対象自体は、文化の会議ですが、その周辺のところにも踏み込んでいけたらと思っています。</p> <p>最後になりますが、宮崎委員から評価結果をどう活かすのかというお話がありましたが、私もその点には非常に興味があります。評価結果をどう活かすかということは、言いかえますと、この成果を今後どう発信していくのかということでもあると思いますし、この評価のプロセス自体も何か発信する材料にできるのかなと思いますので、せっきくのこの興味深い取組がいろんな人に知られて、さらに関わり代が生まれていくようなものになればいいなと思います。私自身も色々試行錯誤しながら、1年間関わっていきたいと思いますので、皆様よろしくお願ひします。以上です。</p>
出口委員長	<p>専門委員2人から本当に良いご意見を言っていたいてありがとうございます。つづきまして、落合委員お願いします。</p>
落合委員	<p>アートコーディネーターという言葉の定義について、事務局からの説明で、アートコーディネーターとしての活動を生業にしているというような言い方があったかと思うのですが、必ずしもそうではないのではないかっていうのが、私のとらえ方です。これは、まちづくりコーディネーターのように、何とかコーディネーターという言い方は、世間にたくさんありますけれども、それは、生業にしているかどうかということでは関係なく、アートコーディネーターであれば、その文化や芸術をつなぐ、あるいは文化芸術でつなぐという機能を果たしている人かなと思っています。</p> <p>そうであるとすると、この「つどい、つながる文化の会議」で育てているのは、市民コーディネーターではなく、市民アートコーディネーターということではないかなと思います。ですので、プロと市民で分けるのであれば、そのような表現にし</p>

発言者	発言内容
<p>出口委員長</p>	<p>の方がよりはっきりするかと思いました。その点が、言葉の使い方として気になったところです。</p> <p>それから、役割のところ、「①つどう・②つながる・③つたわる・④つなげる・⑤つくりだす」というふうに整理されていますけども、コーディネート機能でいうと「④つなげる」や「⑤つくりだす」は、コーディネーターが「つなげる」、コーディネーターが「つくりだす」というように、主語をはっきりさせることが、言葉を決める際に大事かと思います。</p> <p>「②つながる」はつなげた結果としてつながる、「③つたわる」も、「つたえる」というのが役割であって、コーディネーターが伝えたから伝わっていくということなので、役割っていうことであれば、コーディネーターが何をするのかという言葉の選び方をするほうが、よりわかりやすいのではないかなと私は思います。</p> <p>あと、これまでおにクルを開館するにあたり、いろいろな市民会議、広場コーディネーターによる広場会議や市民活動のコーディネーターを育てるための集まりなど、様々なことがあって、いろんな人がおにクルを中心に、いろんなイベントを実施してきました。少し前ですと、都市政策課の「みちりノ」という道を活用して何か集える場所がつくれるのではないかという社会実験も行われていました。それらの取組は、別に文化的コモンズを作ろうとして行われてきたわけではないのですが、おにクルの開館をめざして、いろんな市民を集めて、ごちゃまぜにしていくことで、結果的に文化的コモンズというものができ始めているのかなと思っています。そのような取組もおにクルが開館したことで一段落しているのかなと感じているので、この「つどい、つながる文化の会議」で、新たに文化芸術分野でコーディネーターを育てていくというのは、なかなか良いタイミングでスタートしているのかなと思いました。</p> <p>あと、コーディネーターという言葉でいうと、調整する人という一番ミニマムな定義がありますが、そこからプロデューサー的な仕事をする人というところまで拡張していくのかなというのがありますし、プロデューサーの仕事をやっていると、いろんな人と繋がっていくので、結果的にその人がコーディネーターでもあるということにもなると思いますので、いろんな切り口でコーディネーターは育てられるのかなと思います。</p> <p>毎年、この「つどい、つながる文化の会議」を作っていくときに、今回はどこに焦点を当てるのかということをやりはっきりしていくと良いのかなと思いました。</p> <p>はい。ありがとうございます。非常に大事なポイントをいくつも言っていただきました。特に最後の部分は、昨年度は5回目にイベントとしての成果発表の場がありましたが、今年度はそうではなくて、次年度に向けた具体策の検討というところが焦点だと思いますので、その点について事務局からご説明いただければと思います。そのほかのねらいがはっきりしているのであれば、補足していただければと思</p>

発言者	発言内容
事務局 (能勢課長代理)	<p>います。</p> <p>昨年度との比較でいきますと、絵本朗読のBGMを演奏いただいた外の団体とも関わる機会はありませんでしたが、昨年度は結果的には参加者同士の交流がメインとなりました。今年度の視点としては、外の団体との関わりを広げていきたいと考えています。</p> <p>なので、アイデア出しをする中でも、本当にそれが実現可能かどうかといったところは、関係団体と調整していき、それはもちろん市が音頭をとる部分もあるのですが、実際に参加者が調整するというのもできたらいいのかなと思っています。今年度は、参加者がいろんな団体と関わる機会を増やしていくことに重きを置いてやっていきたいと思います。</p>
出口委員長	<p>文化振興課を通じた文化政策は、単年度予算で執行されているが、今回の場合も当然単年度予算であって、次年度に向けた具体的な検討結果が最後出されるけれども、この内容については、今の段階では見えてないという理解でよろしいでしょうか。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>おっしゃるとおりです。</p>
出口委員長	<p>そういうことですね。なので、そこがやはりこの委員会で諮問・答申する意義だと思います。やはり、文化の会議は、行政からするととんでもない試みだと思いますので、その点を十分に斟酌していただければと思います。</p> <p>それから、ご指摘のあった「つどい・つながる・つたわる」という部分と、「つなげる・つくりだす」という部分については、事務局でかなり力を入れて説明したところなので、もし何か議論があればお伺いできればと思います。いかがでしょうか。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>落合委員から、主体がどこなのか、主語が何なのかということをはっきり持った方が、より伝わるのではないかなというご意見だったかと思います。それでいくと、確かに特に伝わるっていうのが、自然的に伝わりと感じられ、参加者の意思で伝わったっていうことが、ちょっと表現しきれていないのかなと思いますので、もう少し役割として「つたえる」の表現のほうがいいのかなと思いました。</p> <p>この役割については、事務局でもう一度5つの表現を再度検討させていただきたいと思います。</p>
出口委員長	<p>この主要の3つの役割「つどい・つながる・つたわる」というのは、自動詞なの</p>

発言者	発言内容
事務局 (能勢課長代理)	<p>で、これに対して、アートコーディネーターの役割でもある「つなげる・つくりだす」というのは、他動詞で、ご指摘があったように主語がはっきりしていて、目的語である誰と誰をつなげるというのがはっきりしているということなのですが、市民の中から19人集めて、6回のプログラムで何かをやって、その中でコーディネーターが生まれて、出来上がった後の役割なのか、この19人の参加者の方が、6回の中で完結する役割なのか、その点はいかがでしょうか。かなりハードルが高い提案がされていると感じますが。</p> <p>最終的に担ってもらう役割という想定ではあるのですが、昨年度から継続して参加されている方たちのモチベーションを見ていると、今年度に行える部分はあるのかなと思っています。今年度はまだ1回目で、特性等含め皆さんのこと知っているわけではないのですが、できるところはもう今年度からも活動として実施していきたいとは考えています。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。その他何かございませんでしょうか。</p> <p>それでは、川本委員お願いいたします。</p>
川本委員	<p>前回に比べて内容が非常にわかりやすく整理されてありがとうございます。</p> <p>私は茨木市に30年以上住んでおりますが、肌感覚として、特にこの10年ほどで文化に対する取り組みが飛躍的に進んでいると感じています。</p> <p>「いろんなことをやってみよう」という姿勢が、行政だけでなく市民の間にも広がっており、果敢に挑戦する姿や、それを寛容に受け止める雰囲気、まちのあちこちで見かけるようになりました。</p> <p>それは、おにクル開館に係る100人会議なども含めてなのですが、私たち市民のための文化を築き上げていこうと行動されている市役所の職員の方をはじめ、市民自身が感化されて活動につながっていると感じます。今後の茨木市を支えるためには、今の考えや行動のもとに、市民自身が自ら文化活動を担えるように育てていくことが重要であると考えます。市民が、市民のために、自ら居場所を作り、自分たちのために活動していくということは、少子高齢化社会に非常に大事な土台になると思いますし、そういうきっかけが、10年後20年後の茨木市にとって非常に大事な役目になると思っています。</p> <p>あと、皆さんの意見を聞きながら、私自身が混乱しているところがありまして、どうなればこのコーディネーターになれるのか、というのがわからなくなりました。担う役割のところを読むと、最初、いろんなところで活動している人がコーディネーターになるのかなと受けとめたのですが、育てていくところをお聞きすると、例えばこの会議に参加した人が、市民コーディネーターとして登録される等して活動していくのか、どうすれば市民コーディネーターになれるかといえるのか</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>が、あまりイメージが掴めなかったので、今回のこの市民コーディネーターがどう位置付けされているかという点は整理させていただきたく思いました。</p> <p>また、この実施内容に関して、結構専門的な内容である印象を受けまして、最初に説明いただいたサポートやボランティアとして事業のお手伝いをするとおっしゃっていた方々より、もう1ランク上の役割が「市民アートコーディネーター」なのではないかと感じました。「このような人が市民アートコーディネーターである」といった明確な基準や考え方があるのでしょうか。</p> <p>大事な質問ですね。事務局側はいかがでしょう。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>実際に今年度やってみながら検討していくというのが正直なところで、まずは参加者の皆さんに、文化芸術に触れながら、こういった活動の楽しさを経験していただくのがまず第1かと考えています。皆さんが自主的に継続して、負担感なく続けていただきたいというのが、市としての思いです。</p> <p>なので、これを満たすと市民アートコーディネーターという基準の枠を作る方がいいのか、もしくはその枠がないからこそ楽しんで参加いただけるかという部分は、現時点で判断が難しいところではあるので、登録制にするかどうかについては、やりながら考えていければと思っています。</p> <p>ちなみに、参加者の方々にはごちゃの間ファミリーのロゴのバッジをお配りしていて、参加者の皆さんにつけてもらっているかと思うのですが、一旦この「文化の会議」に参加いただいた方たちは、市としては、市民コーディネーターとして活動を学んだという認識のもとで、継続して活動していただけたらと考えています。</p>
出口委員長	<p>すいません、ちょっと答えになっているかわかりませんが、専門委員の方々は、そのような理解でよろしいのでしょうか。</p>
常盤委員	<p>はい。前のところで、落合委員が指摘されたコーディネーターはプロに限らないという点に私もその通りだと思いますので、表現はより整理されるというところに賛同したうえで話として、このような言い回しは曖昧かもしれませんが、どうなったらコーディネーターになるのかというのは、おそらくその人がそのアイデンティティを持つかどうかなのかなと思います。</p>
出口委員長	<p>ありがとうございます。他にはいかがでしょう。</p>
宮崎委員	<p>はい。アートコーディネーターや市民コーディネーターかどうかというところは、まさしく今常盤委員がおっしゃった通り、アイデンティティいわゆる自身の心</p>

発言者	発言内容
<p>出口委員長</p>	<p>の持ちようで、例えば、別の仕事をしていたとしても、文化芸術が好きで、美術・音楽・演劇などの企画をするなど副業でも成り立つものですし、好きだから無報酬でやっていたとしても、そのような場合ももちろんアートコーディネーターになり得る。そこにある程度の専門性が求められる、一種の責任みたいなものがのしかかってくるのかなと思います。</p> <p>それだけではなくて、例えば、文化芸術が好きで、お客さんとしてそういうところに行くとか、ボランティアとして、企画の主な部分は専門的な知識を持つ人に任せるけれども、例えばSNSで発信するなど、負荷がより低いところで何か協力できることはしますよという、どちらかという区分けではなく、グラデーションのような形で、自分はこれぐらいできるよ、自分はこれぐらいしかできないみたいなところを、アイデンティティという言葉を使えばよいのか、自分の中でこれぐらいやるって決めるところが、アートコーディネーターなのか市民コーディネーターなのかの区分けなのかなと思います。行政のやることなので、文言で明確に区切らないといけないところはあるのかもしれないけれども、現場レベルで言うとそこまで区切る必要はないのかなと思っています。</p> <p>すごく大事な点をお話いただきありがとうございます。</p> <p>行政的にはこの19人を集めたのだから、一義的な目標としてそういう、市民コーディネーターとして、めざす役割の人たちを考えつつも、実際にはグラデーションがあって、もっと外延的に広がるというふうに考えたら良いと思います。</p> <p>ただ、資料の項目名が「茨木版文化的コモンズを形成するために必要なコーディネーター」となっていますので、茨木市という都市の単位からすると、やはり19人という人数を、実験的にこういう仕掛けでやっていくけれども、そこから今宮崎いいがおっしゃったようにグラデーションというかですね、次々と相互に市民コーディネーターが誰かと関わることで、次々にそのような人たちが生まれてくるようなイメージが、このタイトルではないのか、それが文化的コモンズなのではないか、と思っているのですが、事務局側はいかがでしょうか。</p>
<p>事務局 (今西次長)</p>	<p>登録制度という認識になるとすると、今後10年の中で、なるべく実装していただけるような、そういった市民の方、ご自身の生活の中になるべく溶け込み、文化芸術への関わりが溶け込んでいく、馴染んでいって欲しいという思いもあります。すごく抽象的な表現ではあるのですが、登録制度にすることで、何かこういった活動を経験された方、あるいは行政と関わった方だけがこの市民コーディネーターと聞こえてしまう、あるいはそのような枠組みになり、広がり求めてしまうように感じますので、その点はもう少し事務局側もうまく説明できるようにならないといけないかなと思いますが、限定的、視覚的に基準を定めようと考えてはおりません。</p>

発言者	発言内容
川本委員	<p>必ずしもこの「つどい、つながる文化の会議」に参加した人が、市民コーディネーターというわけではなく、この会議に参加していなくても、市民コーディネーターというのは、潜在的にたくさんいらっしゃるというイメージですかね。</p>
事務局 (今西次長)	<p>おっしゃるとおりです。</p>
出口委員長	<p>おそらくですが、「おにクルは市が作りしましたね。私たちは関係ありません。」という市民が、「おにクルができましたね。これは私たちのものです。何か関わることがあれば関わりますよ。」となるのが、広義の市民コーディネーターの活動の意味になってくるのではないかと思います。</p> <p>その点で、ご承知かと思いますが、将棋の竜王戦というものが、昨年11月におにクルで開催されたのですが、将棋のタイトル戦というものは、おおよそ有名な観光地の高級旅館ですするというのが伝統的で、公共の施設で行われることはほとんど有り得ないことだったのですが、話を聞いてみると、これは先ほどの「つどい・つながる・つたわる」ではないですけど、まさに伝わるという感じで、市民の中の団体の声や、高槻に将棋会館が移転してくるというきっかけもあったのでしょうけれども、通常では考えられない、竜王戦というか将棋の一大タイトル戦を、公共施設であるおにクルで開催しようということを誰かが言い出した。誰かが言っただけでは、実現しないけれども、それがどんどん伝わって行って実現したということですね。このようなことが、まさに市民コーディネーターが担うべき役割なのかなと感じています。そういう意味で、先ほど最初に私が申し上げたのは、そういう概念的な広がりも、評価に入れるのか入れないのかってということで、単にこの19人がどうなったかということだけではなくて、茨木市っていうのはそういう、通常行政ではやらないことにチャレンジし、そのことが直接影響したか否かは一旦置いておいて、そのような市の姿勢があることが、やっぱり何らかの形で市民に伝わって、それをアンテナとしてキャッチした人が、タイトル戦をやろうと、これまさに他分野の連携、要するに今年度のテーマとなっていることが起きていると私は感じているのですが、いかがでしょうか。ちょっと時間があるので、いろんな話をさせていただいているのですが、他の委員の皆様もご意見等ありましたらお願いします。</p>
雨森委員	<p>「つどい・つながる・つたわる」の話について、もう1回私も見直してみて、気づいたのですが、「つながる」のところ、「文化芸術に興味を持つ市民や実際に活動する市民団体と交流する」のは、このコーディネーターが主語となっているということではなかったでしょうか。</p>

発言者	発言内容
事務局 (今西次長)	おっしゃるとおりです。
雨森委員	<p>市民コーディネーターの役割については限定されるものではないですし、そこを明確にする必要はないのですが、もう少し整理してもいいのかなという気がしました。</p> <p>「つどう」に関しても、いろんな事業のボランティアに関わることも含まれますと、最初に事務局から説明があったと思いますが、それを踏まえていくと、例えば、昨年度参加した方々がこの講座に参加したことで、市内の文化芸術事業に足を運んだり、サポーターやボランティアとして関わったりしたか、ということも、この事業の評価項目としてあるといいのではないかと思います。可能であれば、メールなどでアンケートをとってみることも考えていただければと思います。</p>
事務局 (能勢課長代理)	<p>ありがとうございます。この「文化の会議」をきっかけに、どのような広がりが生まれているかというのが、今雨森委員がおっしゃっていただいた「参加後に何か事業に関わったり、足を運んだりしたことがあるか」といったことになるかと思えます。</p> <p>参加者の皆さんが、この会議を通して、どのように変化していったかという部分について、最終の座談会で聞き取りしたりするなどして、情報収集をしていこうと思います。</p>
出口委員長	ありがとうございます。その他何かご意見等ございませんでしょうか。
川本委員	<p>おにクルの前のIBALAB@広場では、マルシェを開いたり、演奏されたり、ほぼ毎日毎週末多くの方が集まって何かをやっていて、事務局から回答のあったように、そうした活動の担い手として、すでに一定数の市民コーディネーターが存在しているような印象を持っています。</p> <p>茨木市には、活動的な市民が非常に多くいるという前提があるからこそ、ここの「文化の会議」というのは、もう一段階上と言いますか、すでに活動している市民の方々がどれだけいるのかを把握し、その方々をどうつなげて、どう関わってもらい、どう育てていくかという視点が、今後の茨木市に求められるのではないかと思います。</p>
事務局 (今西次長)	<p>本当におにクルで活動されている方が、どちらかという市民活動という、言葉で表現されていることが多いのですが、文化芸術を市民の方が行う市民活動で、出口の表現方法が文化芸術の分野であるだけではないかなと思っておりまして、すでにそういう機会というか、活動の種をまいただけではなくて、芽があら</p>

発言者	発言内容
出口委員長	<p>こちらで出てきていると思いますので、そこをどう文化芸術の分野での発展につなげていけるかというところが、今回「文化の会議」を実施することによって、より明確化していきたいと思っております。</p>
出口委員長	<p>他には何かありますでしょうか。</p>
雨森委員	<p>配付された資料「第1回実施報告書」2ページの今年度のゴールのところ、 「市民コーディネーターとして必要なスキルや関係性の築き方を学び、文化芸術×他分野の取組みを知ることで、他者や他団体とつながるアイデアを考える」との記載がありますが、アイデアを考えるというところで思ったことなのですが、机上の空論ともよく言われていますけど、机上で考えていると現実からかけ離れたものになってしまいがちですので、アイデアを考えるときには、具体的な現場を思い浮かべて自分ごととして考えるということが重要ではないかと思えます。</p> <p>あと、最終年度のゴールというところでも、やはりおにクルでの活動だけではなくて、自分が住んでいる場所や地域で、どのような活動ができるかということを考える市民コーディネーターの方が増えていくようなプログラムになると良いなと思えました。</p>
事務局 (今西次長)	<p>おっしゃる通りで、おにクルを中心とした活動というのが、今すごく芽吹いているのですけれども、それを茨木市全体で広げられる、それが10年間の目標と考えております。</p>
出口委員長	<p>どうもありがとうございます。それではもう大変活発なご意見をちょうだいいたしました。</p> <p>これから宮崎委員と常盤委員にはご尽力いただくこととなりますけど、何卒よろしく願いいたします。</p> <p>それから6回のうち、1回は市内のどちらかに行かれると思うのですが、今年は特に暑いので、健康面や熱中症も含めて注意していただければと思います。</p> <p>それでは、案件「『つどい、つながる文化の会議』の事業評価について」を終了します。</p>
出口委員長	<p><b>4 その他</b></p> <p>本日の案件は以上で終わりました。</p> <p>委員の皆さま、他に何か意見等はございますか。</p>
出口委員長	<p>それでは、意見も出尽くしたかと思っておりますので、議事進行を事務局にお返しします。</p>

発言者	発言内容
事務局 (今西次長)	<p>ありがとうございます。ここからは事務局で進行させていただきます。事務局からの連絡事項を申し上げます。</p> <p>本日の会議録につきましては、後日、メールにてお送りし、内容を確認いただいた後に公開させていただきます。</p> <p>また、次回の日程につきましては、文化の会議の実施報告として、10月頃の開催を予定しております。日程が近づきましたら、あらためて事前に日程調整のご案内をさせていただきます。</p>
事務局 (今西次長)	<p><b>5 閉会</b></p> <p>これもちまして、本日の議題は、すべて議事が終了しましたので、閉会させていただきます。</p> <p>本日は、ありがとうございました。</p>